

営費が打切られて先生のご苦労の種がそこでまた増えた。私自身も定年でOBとなり、それから5年ほど経った。

最近は資料センターの経費も正規に復活し、災害科学の研究も新たな形で活発に行なわれていることを、酒井先生は私共の届かぬ所からごらんになって喜んでおいでになるのではなかろうか。

(こじまけんじ：北海道大学名誉教授)

## 酒井良男先生と災害科学研究

若濱五郎

自然災害の研究が総合的かつ組織的に文部省・大学にとり上げられたのは、周知の如く、昭和34年9月、伊勢湾台風がもたらした大規模な風水害がその契機になった。当時、福井大学学長であった長谷川万吉先生の主導の下、現在の自然災害科学研究のさきがけが開始されたが、先生の脳裏には、戦中、戦後にかけて頻発した地震、台風等による大災害——昭和19年の東南海地震、同20年の三河地震、同22年の南海道地震・津波、同23年の福井地震、又は、戦後、本土各地を襲った枕崎台風、キャスリン台風、アイオン台風、ジェーン台風等による大風水害があったに違いない。当時、東京大学工学部の大学院にあって建築工学の研究をされていた若き日の酒井良男先生が、後年、地震工学、耐震構造、さらには広く自然災害の基礎研究を推進されるようになったのも、このような背景があったのであろう。

昭和35年、特進研究として始められた文部省自然災害科学研究は、その後、特定研究、更に特別研究へと発展し、現在の重点領域研究へと継続されている。話はやや脱線するが筆者が主に関係してきた雪水灾害は、その初期の昭和38年1月下旬に北陸地方一帯を襲った所謂「三八豪雪」がその契機となって自然災害科学研究に取り込まれた。三八豪雪の突発災害調査に筆者も参加したが、当時、低温研所長であった吉田順五先生の下、長岡、富山、福井等を約ひと月かけて巡り、豪雪災害のひどさを身を以て知ったが、その間、福井では、長谷川万吉先生や塚野先生にもお会いした。両先生はわれわれに雪害研究の重要性をのべられ、その推進を要請されたことを今でもはっきりと思い出す。

その後、自然災害科学の研究が、どのように組織され、どのように運営されてきたかは、当時、一介の若手分担者として実働部隊にあった筆者にはよくわからない。知っていることといえば北海道に地区部会がおかれ、吉田順五先生、村井延雄先生、田治米鏡治先生といった大先生が地区部会長として活躍して居られたことくらいである。酒井良男先生は昭和41年にその後をつがれて地区部会長に就任され、以後、18年半の長きにわたり、北海道における自然災害研究の総師として、又、全国の総合班の幹部メンバーとして災害研究のリーダーシップをとってこられた。その頃、筆者は時々、北海道地区部会主催の研究会に出席して、遠くから先生のお姿に接したが、先

生は筆者にとって雲上人の如き存在であった。

筆者が、突然、酒井先生と直接お話しができるようになったのは昭和54年4月、筆者が自然災害科学研究総合班の研究計画委員会委員を仰せ付かってからであろう。当時、自然災害研究は曲り角に来ているといわれていた。加えて丁度その頃（昭54年12月）、時の大平首相は科学技術会議に対し、「国の防災に関する研究開発の基本計画を策定せよ」との諮問第9号が出されたので、総合班代表の石原安雄先生以下、幹部の間には一種の危機感がただよっていた。これは、科学技術庁を中心、各省庁振興調整意の下、自然災害研究に乗り出すことを意味するからである。

たまたま筆者は、その科学技術会議の専門委員にも指名され、「国として自然災害研究をどのように推進するか」の原案作成に関与する立場に立たされた。当時の総合班の現役委員と、科学技術会議の委員との双方を兼ねたのは筆者一人であったため、石原先生や酒井先生から、「情報を流して頂戴よ」といわれ、励まされたことを覚えている。

そんな状況にあって、当時の総合班の柱のひとつであった研究体制委員会（志賀敏男委員長）の中に研究推進小委員会が置かれ、大学における災害研究はいかにあるべきかを検討することになった。筆者はその小委員会の委員も仰せ付かった。研究体制委員会には酒井先生がおられたので、北海道からは酒井先生と、当時工学部にいらした尾崎晃先生（研究推進小委員長であった）及び筆者の三名が同小委員会に参加し「80年代の自然災害研究」はいかにあるべきか、研究課題と目標は何か、などについて自然の議論を行なったのであった。

第1回の小委員会が本郷の学土会館で開かれたのは昭和55年10月12日であった。筆者は酒井先生のお伴をして上京し、晝食は先生が愛用された一つ橋の学土会館の食堂でご馳走になり、そこから本郷に向ったが、「若濱君、わたしはもう齢をとった、これからの自然災害は若い人の時代だよ。今日の推進小委員会でも、遠慮せずに、どんどん発言を頼むよ」と激励されたのを昨日のことのように思い出す。

本郷での小委員会では、第1回ということもあって、自然災害研究の理念や総論的なことが議論されたが、尾崎委員長から「今日から若濱君がメンバーに加わった。フレッシュな感覚で意見をどうぞ」と指名されたので、「“大学での自然災害研究は、あくまでも無目的研究である”とする従来の災害研究の考え方（総合班が当時出したパンフレットにそう書いてあった）はおかしい。災害の軽減防除を目指し、社会の強い要請の下に行なう災害研究が、いかに基礎研究といえども、それが無目的というのは言い過ぎである」と述べたら、全員から猛反撃され、孤立無縁に陥った。しかし、大激論の末、結局、「大学での災害研究は無目的研究ではない」という当然の結論に落ち着いたのである。でも、酒井先生はこの結論にはかなり御不満で、その後も「大学の研究はすべて自由で、無目的でなければならない」と折にふれて御自分の考えをもらさせていた。それはそれとして、酒井先生は、委員会に入ったばかりの若僧の筆者が、全国の偉い先生方十数名を相手に一歩も引かず自分の主張を述べ、その上、議論に勝ったことを高く買って下さり、以来、私には大変目をかけて下さるようになった。

その頃であったろうか。当時、総合班の役員、委員の任期が設けられ、地区部会長は3年となつた。でも、酒井先生はその申し合わせがなされる以前から部会長だったので、その申し合わせ

が適用されないということで、北海道地区はその後もずっと酒井先生を部会長にいただき、又、昭和50年に設置された特別施設「北海道地区自然災害資料室（現在、同資料センター）」のセンター長をも兼任された。

私が総合班の委員になった昭和50年代の半ばころ、「北海道はなぜ部会長が交代しないのか」、「いつ迄も名誉教授に頼っているのはだらしがない」といろいろな方から批判された。でも、酒井先生は極めてお元気で、又、自然災害研究の推進に強い信念と生き甲斐を持っておられた。それに、何かと多忙な我々現役としては、先生に部会長をやっていただくと大いに助かるので、ついつい長期間先生に甘えてきたわけである。そんなとき、昭和60年には資料センターの事業費が突然打ち切られ、その復活要求に酒井先生は大へん苦労された。幸い、その後、平成元年度から正式に「北海道地区自然災害資料センター」が認められたのも酒井先生の御盡力の賜といえよう。

それはとも角、先生は昭和61年9月、外圧に押されて不本意ながら地区部会長の職を退くことになった。18年半の長きにわたり、それを天職の如く励まれ、愛されてこられた先生御自身が引退を決断されたとはいえ、外圧に屈されての無念さをはっきり顔に出された先生とお会いするのは辛いことであった。先生は会津若松に生をうけられたが、会津落城の如き心境であったと私は拝察していた。

18年半の長期政権の後の人選は甚だ難かしい。迂余曲折の末、地区部会長と資料センター長の職を分離し、前者を若濱、後者が酒井先生の愛弟子の太田裕教授が担当し、二人三脚でやることになった。時に昭和61年10月であった。しかし先生は従前通り、週に3回（月水金）は朝早くから資料センターに出勤され、資料の整理に当ってこられた。すなわち、十勝沖地震、浦河沖地震、有珠噴火などの突発災害調査等の際に撮られた膨大な数のスライドを整理し、番号を付し、説明をつけ、更にその音声化を図られたのである。これについては他の方が書かれると思うので詳細はそちらにゆずるが、地味な仕事を全くのボランティアで黙々と続けてこられたのである。

災害データはいずれも貴重なものであるが、それをすぐ使用できるものに整理しておかなければ結局はデータの死蔵となってしまう。災害直後の生々しい現場写真は特に貴重なものであるが、日時、場所等の説明がないと後の人人がデータとして生かせない。このような努力をしなければならないと誰でも口にするが、一体それを誰がするのか、ということになると皆、黙ってしまう。それを酒井先生はコツコツと続けられ、身を以って災害資料の重要さを示してこられたのである。それが、もうあと一歩というところで病に倒られ、幽明境を異にされた先生の無念を思うのである。文字通り自然災害一途の一生であった。

酒井先生は人に接するにいつも温顔で、笑みをたたえて居られるのだが、至って喧嘩っ早く、気にくわぬことや意見が違ったりすると、相手が誰であれ、かっかしながら大声でやり合う。酒が入ったりすると特にそれがひどくなつた。これも純粋で曲ったことの嫌いな会津の血のなせる業と思う。先生のように、利害打算を越え、純粋に学問を愛し、自然災害研究に打める方は、滅多に居ないことであろう。

先生はよく、若き日々を東大の地震研究所や理化学研究所で過されたときのことを回想され、当時の戦時研究ではあったが、各分野の研究者が専門を越えて協力したことの利点を話された。

自然災害の研究もその点全く同じで、災害の軽減防除という目的に向って、いろいろな分野の人々が協力してこそその目的が達せられるし、又、各分担者の視野も拡がる。「これが自然災害研究のいいとこですよ」とよく言われたことを思い出す。また、地震などの災害の現場に駆けつけ、災害のひどさ、恐しさを身を以って体験され、「学者が象牙の塔にばかりこもっていてはならない。自分の専門を通じて災害の防除に貢献するのは、人間として当然のことである」との信念を何回か御一緒の飛行機の中でおききました。

先生は大正4年生れであるが、所謂、明治の風格をもって居られた。御病気で通院されていた先生は災害資料の整理を御自宅にまで運んでされていたが、それは病に倒れる日まで続いたのである。

「倒れてのち、やむ」とは先生のような人生をいうのであろう。

心から先生に感謝し、御冥福をお祈りするものである。

(わかはまごろう：北海道大学低温科学研究所所長、前北海道地区部会長)

## 酒井良男先生に導かれて

太 田 裕

酒井先生ご逝去の訃報は、先生をよく知る人達はいうまでもなく、多少とも自然災害に関心をもつ研究者にとっては近来にない悲しい知らせでした。直後は、衝撃のあまり呆然とし、先生との出会い、先生と共に過ごした日々、先生に接することで得た人生訓のアレコレなどが無秩序に去来し、ご葬儀に参列させていただいた札幌での滞在は、私の最近における最も悔しい日時でした。

ある人は先生を「最後の大学教授」、「孤高の人」、別の人には「ワンマン」とも「頑固人間」ともいいます。人によって、先生との関わり方によって、先生はそれぞれに違った側面をみせ、到底一語ではいい表わし得ない人格の持主でした。私自身、人生における偉大な師としての先生との長い年月にわたる時間をもちろん、先生の全体像について何ら確信めいたことを申し述べられる域には到底達し得ていないことを実感する昨今です。

先生との思い出は山程あります。ここに幾ばくかを書き留め、思い出のよすがと致したく思います。これが、先生の在りし日のお姿を汚し、あるいは過ぎたる偏見とはなっていないことを祈るのみです。

### 1. 出会い

先生のご甚力によって、私が大学紛争末期の地震研究所から北大に移り、工学部建築工学科耐震工学講座担当となりましたのは昭和48年(1973)4月のことです。それ以来、平成元年(1989)9